

能登半島の海と人

矢ヶ崎 孝 雄

能登半島の特色

海洋の利用については水産や鉱産などの海洋資源の利用を始めとして、船舶や港湾による海上交通面⁽¹⁾、さらに近年著しく発展しつつある観光面⁽²⁾での利用などが挙げられる。これらは大海原や大陸棚など陸地を離れた海域での利用と、海陸の接線である海岸の利用との二つの場合に大別される。港湾や観光地としての利用は後者の場合に属するものである。

半島は三面を海に囲まれ、海洋性に富む地域であるが、半面陸上からは地峽性を示し、半孤立性の地域とされる。その突出した地形は先端において窮まり、岬端性の地域とされている⁽³⁾⁽⁴⁾。

能登が半島として以上の海洋や半島の一般性を具備した地域である点は、他の半島と共通的である。しかし、なお具体的にその地域的特色をみるならば⁽⁵⁾、おおよそつぎの諸点に要約しえられるであろう。すなわち、本州の中部において日本海に突出した位置的特色、日本海を大きく南北に両分する半島の規模の大きさにまず注目される。かつて半島で一国を形成したのは、上総・安房・伊豆・志摩・大隅・薩摩と能登であり、志摩半島を除いてはいずれも規模の大きい半島である。さらに能登半島は位置的には北陸にあり、深雪地帯に位置する点も特色である。ただし、

北陸のうちでは能登は種々の面で特殊性を示す地域であるが、半島として海洋性に恵まれていることからして、深雪地帯とはいえ、北陸のうちでは積雪の比較的少ない地域になっている。

以上の三点は能登半島の大きな特色であり、人間活動の基盤に関連するものである。さらに若干の微細な特色を加えるならば、日本海に面する外浦と、富山湾に面する内浦との二面をもつこと、山岳・平野に乏しく丘陵地が卓越し、山は浅く、水に乏しいことが挙げられる。周囲の海は北方の冷水の流入のほかに、対馬暖流の影響を強く受けており、海底では大陸棚が広大で、石油資源の賦存も予測されているが、日本海の三大漁場の一つとして、水産資源にも恵まれている点などが注目されよう。

海洋の利用

生産と集落 能登の自然は海洋性に富む点に集約されようが、能登の人々の生産もまた海に強く深く依存してきている。水稻単作の米作地帯である北陸のうちでは、能登は本来特殊地帯で、米の不足地帯であった。樹枝状谷の水田や丘陵上の若干の畑では、食糧の自給はできなかった。その不足する食糧は海の幸、塩に大きく支えられてきた。江戸時代、加賀藩は塩に専売制をとり①、能登半島一帯の海岸で製塩が行われた②。藩は製塩民を塩師と称し、塩手米を支給して製塩を納めさせた。その米は越中より多くが海上輸送され、その製塩は越中その他加賀藩領のほか、飛騨へも藩の手を通じて送出された。能登の製塩は揚浜式塩田③による原始的な方法によって行われ、労苦の多い激しい労働ではあったが④、能登人はよくこれに耐えて、生活の糧を海から得てきたわけである。

漁業は古今を通じて能登の主要産業の一つである点は変りない。沿岸一帯に展開する漁業は地先漁業を主とし(図

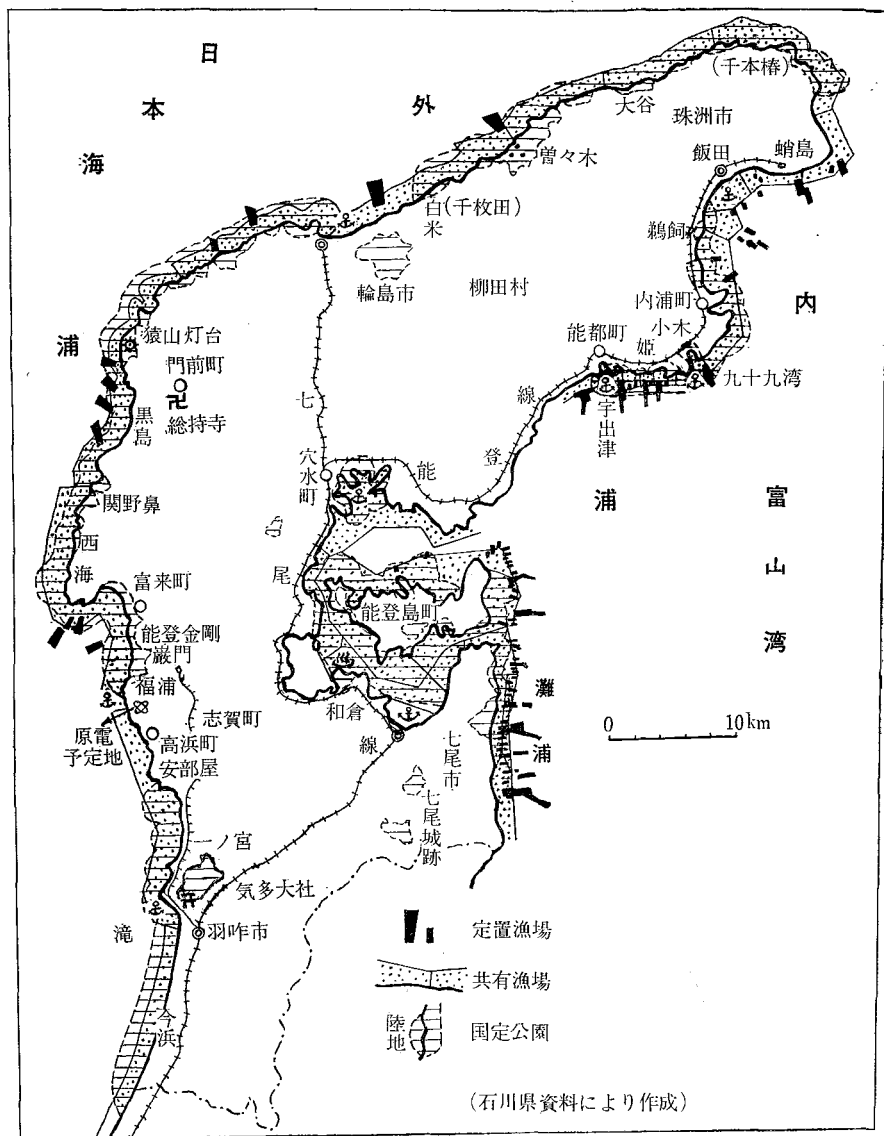


図 1 能登における漁場と国定公園区域

表 1 石川県・能登・加賀における漁業・水産業・養殖業
人口の推移

		男	女	計
石 川 県	1920 (大正9)	9,892	1,223	11,115
	1965 (昭和40)	5,988	533	6,521
能 登	1920	4,956	842	5,798
	1965	5,128	472	5,600
加 賀	1920	4,936	381	5,317
	1965	860	61	921

国勢調査資料により作成

漁船	操業数	所属漁港	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
50 70	2 統 120人	輪島1統 船島50人 船島1統 70人	船 船	まき網漁業(石川県沖・北海道沿岸)												
20 40	45隻 250人	福浦19隻 船島5 加賀21	沖合底曳漁業(石川県沿岸)						休 漁 火和障や暖房試験操							
20 40	57隻 750人	小 木41隻 宇出津9 七尾1 船島1	たたら漁業 (石川県沖)	日本海さけ・ます漁業 (石川・新潟・朝鮮沖)				いしか釣漁業(うら作) 根室・ハボマイ・シコタン沖								
30 50	42隻 700人	流小本12隻 船島4 船島9 船島17	中部さけ・ます漁業 (B区域)													
90 100	4 隻 100人	船島2隻 今浜1 流 1	近海まぐろ漁業				北洋さけ・ます漁業 (A区域)			さんま漁業 (二陸沖)						
300 400	3 隻	宇出津1隻 福浦1 今 浜1	遠洋まぐろ漁業(インド洋・大西洋・ラスパルマス・臺灣沖)													
300 400	3 隻 70人	今浜3	北洋底曳網漁業(アリューシャン・ベーリング海)													

(石川県保険課資料をもとに調査作成)

図 2 能登における漁業の操業状況(昭和44年)

——石川県保険課資料をもとに調査作成——

1)、養殖業を含めて多彩に展開している⁽¹⁰⁾。漁業の規模は零細であるものの、比較的その資源に恵まれていることは、いまもなお多くの漁民を抱えている点にも示される(表1)。ただし、内浦町その他にみられるように、北海道その他へマス・イカその他の漁撈に出漁する漁村も一部にはみられる⁽¹¹⁾(図2)。

海を交通路としては北前船⁽¹²⁾の活躍が注目される。日本海の中央に位置する能登には、大坂・蝦夷との交易を主業とした廻船問屋が数多く輩出し、これに乗り組む水夫もまた多かった。明治後期にこれは退行するが⁽¹³⁾、しかし能登外浦の輪島市から富来町にわたる臨海集落を主体に盛行する船員出稼に移行している。能登は出稼が多く、現在これが問題視されているが、そのなかで前記の出漁もその一形態といえよう。かように海に関連する出稼の多い点は大きな特色とみられる。

能登の海岸が景勝地に富むことは、古より知られていた。これが観光地として脚光を浴びるに至ったのは、つい近年のことで、わが国経済の高度成長と深く結びついている。最近における能登の観光開発は目覚ましく、自然保護が問題とされる地点も生じている。その観光地のうち、とくに自然景観に富む地点は海岸にあり、岩浜と砂浜やリアス式海岸に集約されている。海岸線にそう国道を行くにつれて、多彩な自然景観が展開するが、その自然と一体化して漁村や在町が点綴し、調和のとれた景観を構成している。

肢節に富む海岸線には潤¹⁴もしくは浦と呼ばれる小港が極めて数多く分布する。北前船の活躍はかような港を利用したが、現在はその多くが漁港として命脈を保っているに過ぎない。小港のうち小河川の河口港は比較的いまもよく利用されるが、ここにはなお川水が集まるように人々も集まり、流域一帯を後背地とする在町が発達している。現市町村の中心市街地はかような立地を示すもので、例外は曹洞宗大本山総持寺祖院を核とした門前町くらいである。かよ

うな在町や臨海集落を結ぶ交通には舟が多く利用され、したがって海岸道路の建設整備は近年まで立ち遅れてきた。陸上交通路としては、古代の交通路である尾根道が丘陵上を走り、つい最近まで利用されてきた点にも、道路整備の遅れが反映されているといえよう。

海の開放性 海洋を交通路としては、広く他域と交流することが可能である。その可能性は交通手段の発達と深く関連するのが一般である。ところが潮流は交通手段の発達にかかわりなく、一定方向に生物や文化を流動させる役割をもっている。寒暖両流の潮の流れをもつ能登には、南北両系の植物⁽¹⁴⁾が分布する。一方、海産動物では暖流系のものを主体としつつも、稀に寒流系のものも生息するとされるが⁽¹⁵⁾、これは暖流の方が優位であることによるといえよう。植物景観で奥能登の千本椿や口能登の気多大社の社叢は南方系植物の代表的植相といえよう。

人文現象の面でも能登には広く他域との交流を示すものがある。能登にはアイヌ語・マレイ語の地名が残るという説もあるが⁽¹⁶⁾、その真疑はともかくとして、対馬暖流に乗ってとくに北進性を示す事象が多い。前記気多大社の祭神は大國主命で、能登平定の神とされるが、出雲勢力の能登への伸長がうかがわれる。養老二年（七一八年）の能登立国は加賀の立国よりも古く、北方の蝦夷経営の基地としての役割を荷うことになっている⁽¹⁷⁾。西海地方から能登へ移動してきたものうち、最たるものは舩倉島の海女であろう。九州の鐘ヶ崎より移つてき、輪島市海士町^{あま}を本拠にし、更に舩倉島へ集団渡島する⁽¹⁸⁾。また若狭国高浜からは口能登の高浜町（昭和四五年一月志賀町に合併）へ漁民が渡来し、その町名も若狭の旧地名に由来する⁽²⁰⁾。輪島漆器は紀州根来^{ねら}の僧が技法を伝授したことに基づくといわれる。日本海を経て山陰方面との交渉は古くはとくに重要性を増していたと推察されるが、つい近年まで山陰からは甕売りの船が来航し、筆者も七尾港で親しく目撃したことがある。海を通じて外来の文物が多く渡来したこと

は、漂着神の伝説にも反映され、能登には八〇ヶ所以上にその伝承が残っている(21)。能登半島の他域との関連を示す事例は枚挙に暇のないほどであり、これらはいずれも海を通じての開放性を示すもの(22)といえよう。

他域との交流に国境はなく、したがって外国との関係もまたみられた。古くは渤海国の使者が福浦港に渡来し、ここにはそのため客院を設け、帰路造船して使者を送り返したこともあった(23)。江戸時代、異国船の漂着もあったが、能登の居民が他国へ漂着する例もまた多かった(24)。また幕末には米・仏、さらに英国のハリ卿一行が七尾開港の調査にも来ているほどで(25)(26)、七尾港は新潟港とならんで重視されていたのである。七尾は加賀藩にとって海外への窓口的役割をもっていたが、加賀藩は対外的に門戸を積極的に開く姿勢を示さなかった。ただし、藩は英人オスボンを迎え、七尾に語学所を開設して藩士の英才を教育させた(27)。ここから明治の人物を何人も輩出させている。なお七尾港はこれまで石川県下唯一の開港場で(28)、とくにソ連よりの北洋材を輸入し、国際性を示す都市である。

外来の文物を受容した能登は、他面ここから他域へ積極的に活動する基地にもなった。とくに北前船により他域へ進出した能登人は多く、北海道や大阪で海運や商業・漁業を通じ定住し、現在その後裔も多くみられる。なかでも蝦夷で漁場を開き、寛政年間(一七八九—一八〇〇年)、一時は蝦夷の富を独占するにも等しかった村山伝兵衛(29)は羽咋郡志賀町の安部屋出身であり、日本長者鑑にも名を連ねていた。一方、明治時代に大阪の海運界をリードした西村屋忠兵衛は同じく羽咋市の一ノ宮の出身で、北前船の経営によって富を築いたのである(30)(31)(32)。

舟運と閉鎖性 半島は開放性を示す反面、閉鎖性をも示す。陸上交通からみた場合、半島の突出による地峽性は特別の条件のない限り、軀幹部の陸上交通の発達からは取り残される。能登が袋小路といわれ(33)、僻地性を示すものこの結果であり、前記の半孤立性と称するのも、かような閉鎖性に関連する。一方、海上交通においては船舶交通の

未発達の場合や、天候などの関係で船便を欠く場合には、同様に孤立性を与え、開放性とは全く反対の閉鎖性を示すことになる。

北前船の交通は日本海上交通の動脈をなすものであったが、しかし日本海独特の冬の季節風は激しく荒れくるい、脆弱な和船の交通をはばんだ。北前船は大阪で陸上に揚げられ、船囲いして春の出航を待った。冬の能登の海は全く閉鎖的であった。明治になって西洋型帆船を政府が奨励したのも、脆弱な和船からの脱皮を計ろうとしたためである。

ところで古代の海上交通は陸地に沿って小舟を走らせるものであり、能登の僻地性は濃厚であった。かような点から大納言平時忠は半島先端の大谷^{おおたに}へ島流しされ、ついに帰京できずに奥能登に果てた³⁴。また近世になって加賀藩は七尾湾内に浮ぶ能登島を流刑地として利用した³⁵。これらはともに僻遠の能登の閉鎖性を利用したものといえよう。

一方、能登への文物の渡来は前記のように海を経て行われたが、陸上の文物の波及は他面よほど注意を怠らない限り、ここを通過してしまう恐れがあった。能登守護の畠山氏は戦国大名としては脱皮がおくれ、貴族的風情にふけて、家臣団を戦力的に編成しなかった³⁶。その結果は上杉謙信の攻略による居城の七尾城の落城となった。これは守護大名としての性格にもよるが、また半島地域としての閉鎖性との関連も見逃せないであろう。

前述のように陸上交通が発達する明治以降、能登半島はいよいよ袋小路化し、僻地性を濃厚にしてきた。それは古い民俗が最近までよく残り³⁷、民俗の宝庫と称されている点にも伺える。これは封建的遺制とも評されるが、住民意識の面では近代性が薄く、たとえば国会議員選挙において保守の金城湯池であり、いまだかつて革新の国会議員を選出したことのないことにも関連性があるように思う。

外浦と内浦との比較

外浦の特色 能登における海と人との関係は外浦と内浦とで、それぞれ特色を示している。ここでは両浦の比較を試みることにする。

外浦では山が海にせまり、断崖絶壁の景観が各所に展開する。巖門がんもんから関野鼻せきののはなに至る能登金剛や猿山岬さるやま、奥能登の曾々木そそぎなどはかような景勝地で、現在能登観光の代表的地点となっている。観光を除いては、かような断崖地帯はこれまで利用価値に乏しかった。農耕漁業にも適さず、交通のネックで、とくに曾々木の広木ひらぎの嶮は能登の親不知といわれ、断崖をつたって人は往来し、犠牲者がよく出た。安永年間（一七七二—一七八〇年）、地元の僧が石工にいいつけ岩をけずって道をつけさせて交通が容易になった(38)(39)。ここにトンネルができたのは明治二〇年で(40)、現在はいさらに車道用トンネルが建設され、難所が克服された。猿山岬は能登の最隔絶地であり、大正九年燈台が設置されて、かろうじて燈台守が居住するに至った。現在、観光地としての開発が進められつつある。

かような断崖地を除いても、海岸の平地は乏しく、わずかに河川の流域と河口に平地がみられる程である。住民は限られた耕地を耕し、また外浦に多い地じり地を水田化し(41)、その代表が白米しろよねにおける千枚田せんまいだの棚田である。一方海に幸を求めたが、沿岸漁業が主で、釣漁と若干の定置網漁が行われるほか、波蝕台につく冬の岩のり、春さきのわかめなどの採取が老婦女によって行われる。そして冬の荒海に吞まれ、誰かが命を落す惨事が毎冬みられる。

集落は海浜にそって立地するが、冬の季節風をともに受ける西海岸では間垣まがきで家まを囲い、風上方向の窓を極度に少なくして住居を構える。所によっては屋根瓦を漆喰で固め、茅葺では古い漁網をかぶせたり、また戸を二重

にするものもみられる。奥能登外浦の北向海岸では季節風の受け方はゆるくなるが、岬などの突出部の東側に立地した集落も多く、クダリ風と呼ばれる西よりの激しい季節風を防ぐ。逆に東風のアイの風の日は寒いが天気よく海は凪ぐ。したがって一般に間垣の分布は富来町辺にくらべ疎で⁽⁴²⁾、造り方も粗雑化している。

沖合遠く海の幸を求めては前記のように舢倉島へ季節的に移住する海女の集団がある⁽⁴³⁾⁽⁴⁴⁾。輪島市海士町の漁民で、九州より渡来した歴史をもつ。輪島港は「あぐり網」・刺網・沖合底曳網などによる水揚げが多く、外浦第一の水揚量を示す。第二位の福浦港は「はえなわ」・「あぐり網」漁を主とするが、日本海の中央、大和堆⁽⁴⁵⁾の漁獲物も水揚げされる。外浦のこれらの漁港は日本海に広く漁場を求め、その基地としての役割を果たすものである。近海でも盛大に漁業をするのは富来町⁽⁴⁶⁾⁽⁴⁷⁾⁽⁴⁸⁾。一方、福浦・今浜からは遠洋マグロ漁業や北洋底曳網漁業に出る点も注目される。

対馬暖流は外浦にまともに流れ寄す。甲の長さ一・五—一・八mのオサガメが弱りきって漂着するのはこの外浦である。動植物のほか人や物が流れつくのもここである。前述の出雲・渤海・若狭高浜などとの関係はいずれも外浦にみられるものである。北前船時代、福浦港が避難港・風待港として特に発展したのも、海流との関係位置を基盤として、地形的にも良港に恵まれていたことに基づく。また曹洞宗大本山の総持寺は門前町にあり、現在祖院がここに残るが、その僧は全国より派遣され、船で黒島に上り、寺に至ったものが多い。

断崖の多い外浦では地元での生活の基盤は乏しかった。海に糧を求めたが、北前船の廻船問屋と水夫とはここから多く出た。前記の村山・西村屋などの豪商は外浦を出身地とした。現在は船員出稼が盛行し、輪島市や門前・富来町の臨海集落に多く、日本一の船員出稼の町と称されるほどである。留守家族は海友婦人会を組織するが、船員による

税収は市町の財政にとつても大きな比重を占めている。船員出稼者は門前町九四六人（昭和四四年）⁽⁴⁹⁾、富来町一三一人（昭和四一年）⁽⁵⁰⁾に達する。能登は出稼の盛行地であるが、船員出稼は古い伝統をもち、後継者も多く、きわめて特色的、安定的な出稼を形成している。

内浦の特色 外浦の敵しい男性的な海岸に対して、内浦は対照的である。砂浜や小河川の河口に発達する小デルタがあり、七尾湾は南・西・北の三湾に分れ、また九十九湾に代表されるリアス式海岸もあって、極めて肢節に富んだ海岸線である。外浦が日本海の荒海に面するのに対し、ここは富山湾に臨み、海岸の景観は全く女性的である。南北両流は流れ込むが、とくに北からの流れに乗ってオットセイが漂着することもあり、昔はサケもよく河を登った。現在、越中の水見とならんでブリ漁が七尾の灘浦や能都町で盛んである。

富山湾を洗う海流は、越中と能登を一体化した諸現象を生む。内浦からは富山湾を隔てて立山連峰が望まれ、テレビ・ラジオの電波もまた富山市のものがよくキャッチできるが、富山湾を内海として能越の海上の交流は古より発達してき、経済的紐帯には極めて強いものがある⁽⁵¹⁾⁽⁵²⁾。冬でも余程のシケでない限りは舟が通い、機帆船になつてから、ますます活発となった。富山湾の交通は開港場の七尾港を要として内浦の諸港や国の内外と交流する。とくに陸上交通の近代化以前においては北海道との交流が活発であつたほか、奥能登との海上交通は七尾を基点に盛行した。現代は観光客に利用されるが、水害で内浦の陸上交通が杜絶の場合、七尾と奥能登を結ぶ舟運は重要性を発揮する。七尾は能登の海上交通の基地で、また北洋材・ラワン材などの輸入港として重要で、日本海沿岸を後背地とする合板工業も立地するに至つた。一方、ソ連との関係が重要で、ロシア語の修習も市民間に熱心であり、国際性をもつた都市である。

内浦の海岸は女性美に富み、観光客を楽しませている。近年は内海や内湾の穏やかな点を利用して、リクリエーション施設が発達しつつある。学校の寮や、ヨット・ボートなどの設置が進みつつある。将来はもっとこれらの面での利用が進展するであろう。

内浦は前記の地形とも関連して水田が広い。以前は明治中期まで、一帯に揚浜式塩田が卓越し、前面の海に石垣を築いては埋立て塩田を開いた⁽⁵³⁾。これは水田に置き変ったが、埋立による水田造成はそのあとも続いた。現在海岸線はほとんどコンクリート壁に変ったが、これも内浦海岸を特色づけるものである。海岸段丘の発達したところは奥能登に広く、畑作が発達し、クワヤリソゴ栽培⁽⁵⁴⁾もみられた。このなかで内浦町の海岸地帯ではビニールハウスによる施設園芸農業が発達する。温暖で積雪の少ない海岸を巧みに利用したもので、昭和四一年には朝日農業賞を授賞した。ここではこの営農によって出稼も衰退したという。

内浦は漁業に恵まれている。前記のブリ漁は定置網漁業の代表で、七尾市の灘浦から能都町⁽⁵⁵⁾にかけての地先に設置され、能登の冬を代表する漁業である。また七尾湾では、カキ⁽⁵⁶⁾・真珠・ノリなどの養殖が行われ、能登島ではクルマエビやハマチの養殖もされる。資源培養型の漁業は内浦で著しく発達するが、能都町と能登島町には県の水産試験場・同分場があり、その発展に貢献している。ただし、半島先端部では海況は異なり、地先漁業に恵まれぬ面もあって、北海道のイカ釣りや北洋のマス漁などに出漁する。小木・姫・蛸島などはその中心である。

内浦の海岸にそつては地下資源に恵まれる。和倉と珠洲には無尽蔵といわれる珪藻土が埋蔵される⁽⁵⁷⁾⁽⁵⁸⁾⁽⁵⁹⁾。これは海成のものを主とし、過去の海の贈物である。良質でもあり、その開発利用は将来の課題でもある。また小木には凝灰岩が海岸付近より産出、小木石といわれて建築材料に利用され、これまで船で富山県へもかなり送り出された。

採石の跡地は住宅地として平地の乏しい海岸で巧みに利用されている。和倉は能登一級の温泉地であるが、珠洲・鶴飼・飯田その他多くの温泉が海岸線にそって近年開発された。海に恵まれた温泉として観光上も十二分に利用されている。なかでも和倉は泉源が海中にあり、埋立てて開発してきた⁽⁶⁰⁾。とくに越中の人々にとつては舟路で湯治に来るのがかつては盛行したといわれる。

内浦において海の利用は多彩でかつ奥深いものがある。内浦が富山湾や七尾湾に臨む点は内浦の人と海との結びつきを極めて深く強くさせている根本条件とみられる。恐らく将来その度合はさらに広く深く、かつ強くなること予測される。

口能登と奥能登との比較

能登は四郡に分れていたが、半島基部の鹿島・羽昨両郡を口能登(口郡)、先端部の珠洲・鳳^{ふせ}至^し両郡を奥能登(奥郡)と称してきた。口能登と奥能登とは、先端部へいくほど、岬端性が濃化するといえようが、内外浦のような明確な特色はみられない。

郡界をみると口能登では外浦に羽昨郡、内浦に鹿島郡があり、内外の別がある。口能登では内外浦の経済分化が進み、両浦が自立性をもっていたとみられる。能登開拓の神、気多大社は羽昨市にあつて能登一ノ宮であり、国府は七尾市に置かれ、守護の畠山氏もまたその近くの七尾城に居を構えていた。明治初年には七尾県が置かれ、能登と越中の一部を統轄したが、その県庁は七尾市にあった。口能登では福浦港・今浜^{いまはま}にみられるように遠洋漁業への進展と、七尾港における近海水揚魚の集散など、形態は異なるが漁業は特色を示して発展している。しかし、全般的にみて、

他産業の発展が著しく、漁業の比重は低くなっている。すなわち、合成繊維織物工業が発達し、近年は電子工業も伸びている。一方、金沢市への通勤人口も増加し、その通勤圏に組み込まれつつある。かようにしてこの地域は北陸パロパリの地域に編入されつつあるといつてよいであろう。なお漁業でも養殖業の発達は著しいものがある。

奥能登は郡界が内外浦に区分されず、両浦にまたがって二分され、先端部の珠洲郡とその手前の鳳至郡となる。海岸を基本とした郡界でなく、むしろ袋小路の性格が濃くなり、僻地性を基にして区分されたようにみられる。鳳至郡の地域は半島の幅が広く、内陸山村も多くあり、柳田村のような隔海農山村も成立しているほどである。地先の海で幸を求めて暮すが、条件不備の地域では出稼が盛行する。なかでも海に関連する出稼が顕著な点に特色がある。口能登の今浜などと似て、内浦・能都町辺でサケ・マス・イカ釣漁の出漁などに著しいものがある。工業の発達が近年までみられなかったことも、出稼の比重を大にしている。僻地性の著しい点は大納言平時忠の配流にも示される。しかし、その岬端性は一面他域へ門戸を開くもので、越後・佐渡などとの関連は古くよりあった。かような点はこの岬端地域に他面進歩性を与えるものであり、前記の出漁もまたその反映とみられよう。なお海岸暖地の前記朝日賞受賞の施設園芸や、同じく昭和四五年朝日農業賞受賞の珠洲の酪農にみられるように、かような積極性のある点は見逃してはならないと思う。

海の利用の変貌

地域の姿は土地の条件と時の条件との結びつきの変化に依りて変貌するが、能登における海と人との関係も幾変転を遂げてきている。一般的には港の重要性は低下し、北前船や製塩のような海と関連した産業は消滅してしまつた。

表 2 石川県における漁獲量 (昭和43年度)

	属 人 (A)	属 地 (B)	(A) - (B)
石 川 県	114,435トン	29,995	84,440
能 登	103,003	21,601	81,140
加 賀	11,432	8,394	3,038

農林省石川県統計調査事務所：石川県農林水産統計年報(昭和43—44年)により作成

漁業は不振をかこちつつも、重要性を確保し、県下の漁獲量の主体を構成する(表2)。ただし、沿岸漁業から遠洋漁業へ、あるいは養殖業へと進展を遂げている。今後は大和堆の開発を含めていっそうの漁業開発が期待される。水揚げは陸上輸送の不便から塩干魚その他に加工されたが、現在はトラックによる鮮魚移出を主体とするに至った。

海上輸送は北前船と富山湾を通じる越中との交流で賑ったが、陸上交通の発達に伴い重要性を減じてきている。しかし、特定品目について機帆船による海上輸送は将来も存続するであろう。陸上交通では、七尾線・能登線の国鉄が先端の二市に達する。この鉄道の能登開発に果たした役割は大きいし、いまま地元民のほか観光客の利用が多い。道路は海岸にそって国道が走り、これをラケット道と称している。その整備はおくれ、道路事情はよくない。現在は僻地性の克服のため、金沢や富山に通じる縦貫自動車道の建設が計画され、一部では着工しつつある。これは旧尾根道の復活現代版といえよう。半島は離島より隔絶性は薄いが、その克服のための飛行場の建設が将来は実現するであろう。その動きも一部にある。

能登の海岸はかつて文人墨客が紹介したにとどまっていたが(包)、現在観光地として脚光を浴びつつある。断崖・入江・砂浜・岩浜の地形は清冽な海の水と色、四季の変化に応じて千変万化、公書に悩みつつある都会の人々に憩の場を提供している。観

光・保養面での海岸の利用は今後いっそう高度化するであろう。

志賀町では原子力発電所の計画が進められ、海岸の利用は新たな段階に入りつつある。また海中公園^⑧も二ヶ所指定の運びであり、将来、能登の海はいっそう利用価値を高めていくものと予想される。さらに将来は富山湾の大規模開発の構想も実現性をもってくるものとみられる。

注

- (1) 山口平四郎 海洋の地理 大明堂 昭和四四年
- (2) オーベル ドウ ラリュ 山口貞夫訳 島と人 古今書院 昭和一六年 二八五―二九九頁
- (3) 田中啓爾 地理学の本質と原理 古今書院 昭和二四年 九一―九二頁
- (4) 藤岡謙二郎 岬半島の人文地理 大明堂 昭和四一年
- (5) 青野寿郎・尾留川正平 日本地誌 10 富山県・石川県・福井県 二宮書店 昭和四五年 二七五―二七六頁
- (6) 本庄栄治郎他 御塩方一件・御塩方定式留・御塩方御触留 近世社会経済叢書 第三卷 改造社 昭和一五年
- (7) 吉崎正松 能登塩田の歴史地理的考察 自然と社会 9 昭和二七年 一三一―一六頁
- (8) 日本専売公社金沢地方局 能登半島の揚浜塩田について 昭和二九年
- (9) 上田耕 老の路種 金沢文化協会 昭和一一年 二七頁
- (10) 矢ヶ崎孝雄 能登の漁業集落 地理 八一五 昭和三八年 三一―三六頁
- (11) 藪内芳彦 漁村の生態 古今書院 昭和三三年 一九四―二〇七頁
- (12) 牧野隆信 増補改訂北前船 柏書房 昭和四〇年
- (13) 矢ヶ崎孝雄 明治後期における石川県下の交通 歴史地理学紀要 8 昭和四一年 一一―一三八頁
- (14) 正宗敏敬 能登半島の植物 能登半島学術調査書 石川県 昭和四〇年 九七―一〇五頁
- (15) 能野正雄 能登の動物相 能登半島学術調査書 石川県 昭和四〇年 二〇七頁
- (16) 鏡味完二 日本の地名 角川新書 昭和三九年 一四五―一五〇頁

- (17) 若林喜三郎 石川県の歴史 北国出版社 昭和四五年 四八頁
- (18) 石川県鳳至郡役所 石川県鳳至郡誌 大正一二年 四五八―四八八頁
- (19) 森田平次 能登志徴 上編 石川県図書館協会 昭和一二年 一五七―一五八頁
- (20) 前掲(18) 三五八頁
- (21) 小倉学 伝説と民話 能登半島学術調査書 石川県 昭和四〇年 五一六―五一七頁
- (22) 矢ヶ崎孝雄 能登の歴史地理―海運を中心として―月刊社会科教室 八〇号 中教出版 昭和四三年 二―三頁
- (23) 野間三郎 福浦港についての考察 北陸と海運 北陸中日新聞社 昭和三八年 一八九―二一九頁
- (24) 石川県図書館協会 加能漂流譚 昭和一三年
- (25) 前田育徳会 加賀藩史料 藩末編下巻 昭和二二年 六〇〇―六〇八、六一五―六一七、六三二―六四四頁
- (26) アーネスト・サトウ 一外交官の見た明治維新 下 岩波文庫 昭和三五年 一四―二二頁
- (27) 七尾市役所経済部 七尾軍艦所並七尾語学所由来 昭和二五年
- (28) 金崎肇 七尾港の性格 富山県の地理学的研究 三 昭和三四年
- (29) 北海道庁 北海道史 第一 大正七年 三九四―四〇一頁
- (30) 西村通男 海商三代の記録 金沢女子短期大学学業 第四集 昭和三七年
- (31) 堀田成雄 北前船と西村屋忠兵衛 羽咋市教育委員会 昭和三八年
- (32) 西村通男 海商三代 中公新書 昭和三九年
- (33) 長岡博男 袋小路の民俗 日本文化風土記 4 中部篇 河出書房 昭和三一年 三三四頁
- (34) 石川県珠洲郡役所 石川県珠洲郡誌 大正一二年 七八六―七九〇頁
- (35) 前掲(19) 五一五頁
- (36) 宮下与吉 石川県の歴史 北国新聞社 昭和二五年 八九頁
- (37) 小倉学・四柳嘉孝・今村充夫・亀井京子・清水宣英 能登の民俗 能登半島学術調査書 石川県 四七一―五二九頁
- (38) 石川県図書館協会 能登名跡志 昭和六年 四〇―四一頁
- (39) 前掲(34) 八〇〇頁

- (40) 前掲(18) 九九七—九九八頁
- (41) 浜庄三 能登の地汙り研究 自然と社会 三・四号 昭和二五年 一六一—一七頁
- (42) 矢沢大二 能登の氣候 能登(自然・文化・社会) 九学会連合能登調査委員会 平凡社 一八一—二〇頁
- (43) 金崎肇 舩倉島の自然と文化 人文地理 一—三 昭和二四年
- (44) 矢ヶ崎孝雄 舩倉島 日本の文化地理 第七卷 新潟・富山・石川・福井 講談社 昭和四五年 三二四—三二六頁
- (45) 石川泉水産試験場 大和堆海域に於ける底曳網漁業試験調査報告 昭和三七年 日本海に関する総合研究報告(北大和堆海域の深海開発) 昭和四五年
- (46) 柿本典昭 能登旧西海村における漁業危機と人文地理学の立場 地理学評論 二五—二二 昭和三二年 八〇七—八一六頁
- (47) 柿本典昭 組合自営漁村に関する一考察—八そら張網漁村能登外浦西海漁村の一〇年間の歩みを通じて— 漁村経済研究 昭和三九年 一一—一四頁
- (48) 前掲(11) 二一七—二三二頁
- (49) 門前町史編集委員会 門前町史 昭和四五年 六二九頁
- (50) 全国海友婦人会富来町連合会 富来町船員名簿 昭和四一年
- (51) 矢ヶ崎孝雄 奥能登字出津港における商品流通の研究 金沢大学教育学部紀要 第七号 昭和三四年 七六一—九二頁
- (52) 矢ヶ崎孝雄 奥能登字出津港における流通圏の変貌 金沢大学教育学部紀要 第一〇号 昭和三七年 三三一—四七頁
- (53) 野間三郎・斉藤晃吉 能登島の石垣田—揚浜塩田形態変形の形式— 金沢大学法文学部論集 哲史篇 七昭和三四年一一〇—一三六頁
- (54) 岡本啓志 珠洲市のリンゴ栽培 自然と社会 二七・二八号 昭和三七年 七一—一二頁
- (55) 前掲(11) 二一三—二一七頁
- (56) " (11) 二七六—三二二頁
- (57) 河島千尋 石川県珠洲郡珪藻土の物理的諸性状 石川県地方開発事務局 昭和二五年
- (58) 石川県珪藻土利用研究会基礎部会 昭和三八年度研究報告 石川県工業試験場 昭和三九年

- (59) 石川県 和倉地区珪藻土工業産地診断報告 昭和三八年
(60) 小田吉之丈 和倉土筆 昭和二年(昭和四四年 小田吉之正再版)
(61) 石川県図書館協会 能登名跡志 昭和六年・能登路の旅 昭和七年・統能登路の旅 昭和九年
(62) 日本自然保護協会 能登半島海中公園調査報告 石川県 昭和四〇年